

1960年代アメリカにおける「シュルレアリスト」としてのルネ・マグリット受容

利根川由奈(早稲田大学)

本発表の目的は、1960年代アメリカにおいてマグリットが「シュルレアリスト」として受容された理由とその背景を明らかにすることである。というのも、当時のシュルレアリスムとマグリットを巡る状況に鑑みるならば、1960年代にマグリットを「シュルレアリスト」と名指すことはアナクロニックな行為に見えるためである。たとえば、当時のアメリカにおいてシュルレアリスムはすでに歴史化された芸術運動と見なされ、グリーンバーグらの主導するモダニズムの文脈から外されていた。また、マグリットに限っていえば、1950年代半ばからアメリカのコンセプチュアル・アートやポップ・アートと接続され、現代的な芸術家としてシュルレアリスムの中でも例外的な受容をされていた。こうした状況下において、マグリットが再び「シュルレアリスト」として受容された背景には、1965年にニューヨーク近代美術館で開催された「マグリット」展があったと考えられる。

美術史家サンドラ・ザルマンは、この回顧展をアメリカでシュルレアリスム人気が再燃した契機とみなし、ブルジョワ思想への反発が高まっていたアメリカの文化背景が関係していると述べた¹。しかし、彼女の焦点はあくまでシュルレアリスム受容に当てられ、シュルレアリスム受容とマグリット受容が混同されているため、当時のアメリカでマグリット作品に何が仮託されていたのかは明らかにされていない。そのため本発表では、1965年の回顧展におけるキュレーションと同時代受容を参照項として、課題解決を試みる。

この回顧展のキュレーターは、MoMAのジェイムズ・スラル・ソビーであった。ソビーのマグリット解釈は、基本的にはアルフレッド・バーJr.のそれを引き継いでいると言える。バーJr.は、「幻想美術、ダダ、シュルレアリスム」展(MoMA、1936年)において、マグリットを「夢写真の大家」のひとりとして位置付けている。しかし、興味深いのは、1930年代にはソビーはマグリット作品に独自性を見出していなかったにもかかわらず、1960年代になるとその評価が翻った点である。さらに、マグリット解釈の転換は、ソビーだけでなく、同時代の批評家によっても共有されていたことに注目したい。とりわけ、ソビーや多くの批評家は、ダリを夢想家、マグリットを現実主義者として対置させることで、地に足のついた芸術家としてのマグリットのイメージを形成していた。

以上のように、ソビーと批評家たちのマグリット解釈の転換に着目し、マグリットが「シュルレアリスト」として評価された理由を考察する。

¹ Sandra Zalman, *Consuming Surrealism in American Culture*, Routledge, 2015, pp.91-106.